

# 敬語行動の規定因に関する研究 (I)

高永 茂\*・広兼 孝信\*\*

## A Study on Determinants of Expressing for Politeness (I)

Shigeru TAKANAGA and Takanobu HIROKANE

### 1. はじめに

今の若者は敬語がまともに使えないという発言を、いろいろな機会に耳にする。「花に水をあげる」か「花に水をやる」かといった問題や、「先生、あした大学におりますか」という初歩的な敬語の誤用の問題や、話題に事欠かない状況にある。このとき、多くの人が指摘するのは、発話された敬語の形式についてである。こんな場面で謙讓語を使うとは不適切だ、こちらの尊敬語を使うべきだ、あるいは身内には謙讓語を使わなければならないといったものである。

敬語の使用は、言語能力の中でも、かなり高度な能力を必要とする。通常の言語使用においては、形式と意味との関係が分かっているならば、ネイティブスピーカーの持つ文法能力にしたがって、統語的に文を生成していくことができる。生成された発話も、ほとんどの日本人に問題なく了解される文となる。しかし、敬語の使用にあたっては、ただ形式と意味との関係が分かっているだけでは、不十分なことがある。基本的には同じ意味を持っている形式にも、尊敬語もあれば、謙讓語もあり、通常語（敬語形式と区別するために仮に通常語としておく）もある。「言う」という概念を表現する形式には、オッシュアル、モウシアゲル、イウがある。発話するときの状況に応じて使い分けなければならない。また、尊敬語一般の実際の現れ方には、話題の人物に対する、言語主体の配慮にのみ基づいているとは必ずしも言えない場合もしばしば見いだされる（南，1982：236）。

(イ) (AがBに対して)

A 「オ宅ノ ポッチャンハ コノ 春 中学ニ  
オハイリニナツタンデスネ」

B 「ハイ、ソウデス」

(ロ) (Bのいない場所で、AがCに対して)

A 「Bサンノ ムスコハ コノ 春 中学ニ  
ハイッタンダッテ」

C 「アラ ソウ」

この例では、話題の人物であるB氏の息子だけでなく、B氏（相手）とA氏（発話者）との関係も配慮の対象になっている。つまり、敬語の使用には、形式と意味との関係に加えて、場面（コンテクスト）という要素が絡んでくるのである。場面は、さまざまな様相や状況を内包する概念である。人間関係はもちろん、周囲の状況（場所、時間、伝達手段、あらたまりの度合）、発話者の意向や発話者が何を目標しているか、発話者と受手とが共有する背景的な知識などが含まれる。

どのような敬語の現われも、一種の要素の選択の過程を経てできた結果であると考えることができる。この選択の過程は、ただ一回で終るものではなく、各種の条件に応じたいくつかの段階のものがある。南（1974）は、(イ)言語外の世界の条件による、意味（の範囲）の選択、(ロ)選択された意味（の範囲）に対応する（言語要素の）形（の範囲）の選択、(ハ)言語体系内部の条件による、具体的な形の決定、という過程を考えることができるとしている。(イ)の段階で働く条件を「外的条件」、(ハ)の条件を「内的条件」と呼ぶこともある（林ほか，1974：52-53）。発話者は、このような条件を考慮して敬語を使用したりしなかったり、あるいはどの程度の敬語を使用するかといったことを決定していると考えられる。

\* 教養教育

\*\* 生活文化学科

われわれは社会生活を営む中で、さまざまな役割を担っている。社会の中では、人間関係が生まれ、ときとして上下関係が存在する。社会集団の規模の大小にかかわらず、その社会での役割について考えられる上下関係を「役割的上下関係」と呼ぶ(南, 1987:101)。現代社会においては、この種の関係に多種多様なものがあり、社会のいろいろな面に広範囲にわたって見られる。社長、重役、部長、課長、係長、一般の社員といった職階もある。学校での教師と学生との関係もこの種の上下関係にあたる。上下関係は、敬語使用の外的条件として、重要な位置を占めると考えられる。役割的上下関係のほかにも、生得的上下関係(年齢、家族内の関係)、経歴的上下関係(経験の長短)、能力的上下関係(指導力の有無など)など多種の上下関係が存在する。

ところで、現代の若者の敬語使用においていろいろな問題が発生している原因のひとつに、上限関係の認識の変化ということが考えられる。現代の若者も、「上」の相手には何らかの敬語表現が必要だという規範意識は持ち合わせている。しかし、この規範意識は以前ほど強くなく、その代わりにほかの判断基準が介入してきているようである。広兼(1992)では、他者からの評価を意識する度合(評価意識スキル)が敬語使用に影響していることを指摘している。評価意識とは、敬語を使用する自分自身に対する評価を気にかけるという心理である。

本稿では、若者の敬語行動に影響を与えていると思われる、言語外の規定因について検討する。規定因の中には上下関係のように客観的にとらえやすい外的条件がある一方で、相手をどう思っているか、相手に対してどんな感情を抱いているかといった、極めて内面的な非言語的要因もあると考えられる。同じ「上」の立場にある人に話しかける場合でも、相手によって敬語の使い方や話し方が相違していることがある。これは、教師と学生との間の会話でも、しばしば観察されることである。このとき、発話者が敬語使用の条件としているものは、上下関係とは別のものと考えられる。前述の評価意識もその一つであろうが、相手に対する印象も看過できない。本稿は、親疎の意識や容認期待などと敬語使用との関連を実証的に検討することを目的としている。

## 2. 方法

(1) 被調査者 広島文化女子短期大学 学生117名。

(2) 調査日 平成5年2月17日

(3) 質問票の内容と実施方法

今回の調査で用いた質問票では、まず五人の教師を挙げて、それぞれの教師に対する言語行動を調査した。学生(被調査者)が教師(発話相手)に対して、発話する場面を六つ用意した(Table 1参照)。場面1～場面6では、それぞれの質問文について、回答を自由記述させた。言語行動に関する質問は、場面1から場面6までである。次に、容認期待について調査している。非敬語表現を行う発話場面を三つ設定した。質問内容は、もし、「今日の授業は休講じゃないん?」、「ちょっと、ハサミ貸して」、「ええ、たいぎい(広島方言で“面倒だ”の意味)」と言った場合に、発話相手の教師はどんな反応をされるかについて回答させる形式である。回答は、「1. たぶん、許してくれる」、「2. 許してくれるが、注意もされる」、「3. きびしく注意される」のうち、一つを選択させた。三番目に、被調査者と五人の教師との心理的な距離を測定するために、同心円を描いたメンタルマップを用いた調査と、教師と被調査者の着席距離を調べる調査とを行った。メンタルマップには、中心に「自分」を置き、教師の名前をその周囲に書かせる方法をとった。着席距離の調査では、テーブル(3台)と椅子(30個)を配置した仮想図を用意した。椅子の一つに教師がすわっているという設定で、被調査者に自分がすわるのであろうと考えられる椅子の場所をチェックさせた。四番目に、五人の教師それぞれに対して、どのような印象をもっているかをSD法により7点尺度で調査した。

以上の内容を持つ調査票を準備して調査を実施した。調査は小冊子でおこない、言語行動を調査する項目については自由記述としたので、調査後、高永がそのコーディングを担当した。五人の教師の順番は、呈示順序が偏らないように準備した。

(4) 発話場面と発話内容

発話状況は、学内の日常生活で学生が普通に経験する場面を設定した。一般的にはあらたまった場面と考えられるものである。場面1～場面6の発話内容は、四種類に分類できる。場面1は、入室の許可を求める発話場面である。この場面は、学外の日常生活では、他家を訪問するときに行う「あいさつ文」や家族内で他者の部屋に入るときに行う発話にあたるものである。日常生活では、慣用句や決まり文句が使用される場面である。しかし、学生と教師という関係が存在する学

内の生活においては、より複雑な敬語表現が要求される。場面2と場面5とは、自分の行動を叙述することを目的とした発話内容である。ただしこのとき、状況や発話相手によっては単なる叙述にとどまらず、許諾を求める発話の形式をとることもある。場面3と場面4とは、相手に押印や質問の繰り返しを要求する発話場面である。場面6は、問尋に対する回答である。この場面の問尋の内容には、第三者が含まれている。回答には、発話者と発話相手の関係のほかに、この第三者の存在も影響すると考えられるが、質問文で用いた第三者はどの学生も面識があり、かつどの学生からもほぼ等距離にある教師と考えると、問尋の中の話題の人物として採用した。

Table 1 場面1から6の質問文

場面1	〇〇先生の研究室を訪ねて、研究室の中の先生に「中に入っているかどうか」を尋ねるとき、あなたは何と言いますか。
場面2	〇〇先生の研究室を訪ねて、レポートを提出しに来たことを伝えるとき、あなたは何と言いますか。
場面3	〇〇先生の研究室を訪ねて、「印鑑」を押してくれるように要請するとき、あなたは何と言いますか。
場面4	〇〇先生の授業で質問されて、よく聞き取れなかったのでもう一度言ってほしいと要請するとき、あなたは何と言いますか。
場面5	〇〇先生に、「自動車免許の学科試験のために来週の授業を休む」ということを伝えるとき、あなたは何と言いますか。
場面6	〇〇先生から澤原先生の居場所を聞かれ、「6号館で見かけた」ことをつたえたいとき、あなたは何と言いますか。

注) 〇〇の部分には、五人の教師の名前が入る。

#### (5) 言語行動の分類基準

今回の調査票の特徴は、場面1～6において自由記述を採用している点である。自由記述をさせることによって、被調査者が実際の場面で行っている言語行動をより自然な形で回答させることが可能となる。その半面で、調査後の処理がたいへん難しくなる。本研究では、回答を分析するにあたり、敬語の使用の仕方によって、各場面の回答を五段階で評価した。敬意の表現という点で、もっとも低い回答に1点、もっとも高い敬意表現をしている回答には5点を与えた。そして両者の間を1点間隔で区切っている。

得点の1から5までの分類基準を示すと、Table 2

Table 2 得点ごとの分類基準

得点	分類基準
1	敬語表現が全くない。 不完全な文表現である。あるいは名詞のみである。 短型の文表現である。
2	敬語表現がないが、文としては適当な形式を有している。 敬語表現があっても、その他の部分に卑語が使用されている。 表現が格助詞などを省略した形になっている。
3	敬語表現がただ一つである。 依頼する事柄を直截的に表現している。
4	二重の敬語表現がある。
5	三重あるいはそれ以上の敬語表現がある。 謙譲語(まいる等)が使用されている。 敬語動詞(いらっしゃる等)が使われている。 オ～ニナル形式の敬語表現がある。

のようになる。

得点1が与えられた回答には、敬語表現がほとんどなく、動詞が明示されていない形をとるものが多い。例えば、「研究室に入っている」(場面1)、「はい、レポート」(場面2)、「ここ印鑑」(場面3)などである。

得点2が与えられた回答は、敬語が使用されている文もあるが、その使用の仕方が不適切であったり、格助詞など文の一部に明らかな省略が認められる。例えば、「レポートを持ってきた」(場面1)、「はんこ下さい」(場面3)、「先生、何て言ったんですか」(場面4)、「6号館にいました」(場面6)などがある。

得点3から得点5を与えられた回答には、敬語が適切に使用されている。この三段階の間の違いはおもに、使用されている敬語要素の重複の数である。敬語表現は、一般にその表現の中で用いられている敬語要素の数が多いほど丁寧さが増すと考えられる。この点を分類の第一の拠り所としている。つまり、丁寧語、尊敬語を含めた敬語表現が、いくつ使用されているかを分類の基準とした(Table 3)。得点3では、敬語表現が一つだけである。そして、得点4では二重、得点5では三重というように重複使用されている。ただし、同じ敬語要素でも、謙譲語の使用はとくに敬意が高いと判断した。謙譲語が使用されている回答には、得点の5を与えた。

文末の表現も分類の手がかりにしている。文末が、～シマス、～シマシタ、～シテクダサイのように、て

Table 3 敬語表現に含めた言語要素

A	デス・マス
B	敬意を表現する助動詞 レル・ラレル
C	要求緩和部分 スミマセンガ、モウシワケアリマセンガなど
D	美化語 オー、ゴー
E	モラエル、クダサル、イタダケル
F	文末に位置する～カ、～ケド、～ノデなどの、断定を避ける表現
G	ヨロシイ (イイに対して)
H	特定の言語要素ではないが、「理由の詳しい説明」も敬語表現の一つと考えた

いねいさのモダリティ要素 (丁寧語～マス) を用いて表現されているときと、直截的な依頼表現で終了しているときを基点にして、ランクを決めた。この文末部にさらに多くのモダリティ要素が接続した場合、例えば文末部が、～シマシタガ、～シテクダサイマセンカ、～シテモラエマセンカなどとなっている場合には、より高い得点を与えた。直截的な表現よりも、判断を相手に委ねる表現や、断定を避ける表現の方が、敬意の表現としては、より上位に位置していると考えた。同じモダリティ要素の中でも、伝達態度のモダリティに属する「ネ」や「ヨ」が後接した場合には、一般に敬意度がさがって、相手に対する親しさが増すとされている。場面6を中心に、回答の中で「ヨ」が使用されているものがあった。しかし、場面6以外では「ヨ」や「ネ」の使用がほとんど見られなかった。このことは、被調査者が「ネ」「ヨ」の使用が敬意を低下させる効果を持つことを自覚しており、その使用を控えていることをうかがわせるものである。場面6だけに「ヨ」が出現する理由は、相手の知らないことを教えるというモダリティの機能を「ヨ」に担わせているためだと考えられる (益岡, 1991)。「ヨ」の使用が敬意をいささか低下させているとも考えられるが、回答を分類する際には「ヨ」の有無を判断基準としなかった。

場面3と場面4の要求表現に関しては、次のような基準も採用している。井出・萩野ほか (1986) の研究において、要求表現の丁寧さに影響を及ぼす言語要素があきらかとなっている。まず、要求緩和部分の存在があげられる。中心的な要求事項の前に、「すみませんが」や「申し訳ありませんが」という前置きを用いることがある。これは、謝罪に準じた表現をあらかじめ行うことによって、自分が何かを要求して相手に負

担をかけることに対する自分の「負目」を軽減したり、相手との摩擦を回避するために使用されると考えられる。とくに、「です・ます」がある要求緩和部分が丁寧さの度を高める。同じ、要求緩和部分に使用される表現でも、「先生」という呼びかけだけが使用されている場合は、丁寧さにさほど影響を与えない。したがって、「すみませんが」や「申し訳ありませんが」のように「です・ます」を使用した要求緩和部分が回答に現れていたときには、敬語要素が使用されていると考えた。次に、補助動詞については、「くれる」→「もらえる」→「くださる」→「いただける」の順に丁寧さのランクが上がっていく。本研究では、「くれる」以外が使用されている場合には、敬語表現がなされたものと考えた。

自由記述の際に問題となるのが、方言形が使用されていたときの判断である。今回の調査でも、広島方言を用いた回答が見られた。結論から言えば、広島方言の回答の場合も、方言形だからといって共通語よりもランクを下げてはいない。つまり、方言形も共通語形と同等に扱った。敬語表現が使用されていない場合には広島方言が使用されていても回答の形式 (Table 2) にしたがって、得点1あるいは得点2を与えた。方言の敬語要素も同様に扱ったのであるが、具体的な語形について説明しておく必要があろう。場面6において先生の所在を返答する場面で、「6号館におっちゃったですよ」という回答があった。「おっちゃった」の部分は、「オル」・「チャッタ」という二個の形態素で構成されている。「オル」はもちろん、共通語の「イル」と同じ意味である。「チャッタ」は、尊敬表現の機能を持つ形態素であり、「て」敬語法と呼ばれるものである (藤原, 1978)。広島方言の「チャッタ」は、東京方言などで「何々シチャッタ」と言うときの完了相を表すチャッタとは違うものである。そこでこの「おっちゃった」の敬意度であるが、広島方言の中で考えると、敬意度は高い方である。敬意度を判断するときには、この「チャッタ」も、共通語の敬語要素 (レル・ラレル) と同列に扱った。

このほか、文全体の長さも敬意と関係している。一般に文が長いほど、敬意が高いと受け取られる傾向がある (国立国語研究所, 1957)。ただし、この点は、敬意を表現するための要素や婉曲な表現が多く使用されたり、自分が相手に要求することの正当性を高めるために理由を詳しく説明したりすることと関連がある。また、文の長さを分類の尺度にすることは難しい。測

定の単位を、モーラにするか、単語にするか、そのほかの単位にするかといった問題がある。したがって、文の長さは一応考慮したが、本研究では分類の基準としていない。

場面4を例にして、得点3から得点5を与えた回答の一部を示してみよう。「もう一度言ってください」(3点)、「先生、よく意味がわかりません」(3点)、「よく聞きとれなかったの、もう一度言ってください」(4点)、「質問がよく聞き取れなかったのですが……」(4点)、「聞き取れなかったの、もう一度質問を言ってくださいませんか」(5点)、「もう一度説明していただけますでしょうか」(5点)などである。

### 3. 結 果<sup>\*1)\*2)\*3)</sup>

#### 3.1 場面および相手別の発話内容の丁寧さ

発話する場面や相手によって発話内容の丁寧さが異なるか否かを検討するために、発話内容の丁寧さの評定値(範囲は1~5)を従属変数として5(場面;場面1, 場面2, 場面3, 場面4, 場面6)×5(相手;教師A, 教師B, 教師C, 教師D, 教師E)の2要因(いずれも被験者内)の分散分析を行った(Fig. 1参照)。場面5には、何も言わないや本当の理由を言わないという回答が比較的多くあったため、ここでは分析の対象から除外した。

その結果、場面要因の主効果が見られ( $F(4, 400) = 12.85$ )、下位検定を行ったところ場面1( $\bar{X} = 3.60$ )≒場面4( $\bar{X} = 3.53$ )≒場面3( $\bar{X} = 3.52$ )≒場面6( $\bar{X} = 3.38$ )>場面2( $\bar{X} = 3.15$ )であった。すなわち、「レポートの提出にきたことを相手に伝える場面」での発話内容のみが他の場面での発話内容に比べて丁寧さが低いことが判明した。また相手要因の主効果が見られ( $F(4, 400) = 103.08$ )、下位検定を行ったところ教師D( $\bar{X} = 3.99$ )>教師A( $\bar{X} = 3.58$ )>教師C( $\bar{X} = 3.37$ )≒教師B( $\bar{X} = 3.29$ )>教師E( $\bar{X} = 2.95$ )であった。すなわち、相手によって発話内容の丁寧さがかなり異なることが判明した。さらに場面要因と相手要因の交互作用効果が見られた( $F(16, 1600) = 5.28$ )。そこで相手別に場面要因の単純主効果の検定を行ったところ、

教師Bを除いてすべて有意であった(教師Aで $F = 11.59$ , 教師Cで $F = 3.77$ , 教師Dで $F = 22.95$ , 教師Eで $F = 5.11$ )。下位検定の結果、教師Aでは場面1( $\bar{X} = 3.80$ )≒場面4( $\bar{X} = 3.66$ )≒場面3( $\bar{X} = 3.65$ )≒場面6( $\bar{X} = 3.62$ )>場面2( $\bar{X} = 3.18$ )、教師Dでも場面1( $\bar{X} = 4.33$ )≒場面4( $\bar{X} = 4.18$ )≒場面3( $\bar{X} = 4.10$ )≒場面6( $\bar{X} = 3.87$ )>場面2( $\bar{X} = 3.48$ )および場面1>場面6となり、この2つは上述した場面要因の主効果の下位検定とほぼ同様の様相を示した。一方、教師Cでは場面1( $\bar{X} = 3.52$ )と場面2( $\bar{X} = 3.15$ )の間のみ、教師Eでは場面4( $\bar{X} = 3.09$ )と場面6( $\bar{X} = 2.74$ )の間および場面3( $\bar{X} = 3.06$ )と場面6の間のみ有意差が認められた。このことから、場面によって発話内容の丁寧さを変える相手と(低いレベルで)あまり変えない相手がいると言える。また場面ごとに相手要因の単純主効果の検定を行ったところ、すべて有意であった(場面1で $F = 63.24$ , 場面2で $F = 13.89$ , 場面3で $F = 37.57$ , 場面4で $F = 44.07$ , 場面6で $F = 45.38$ )。下位検定の結果、いずれも上述した相手要因の主効果の下位検定とほぼ同様の様相を示した。

#### 3.2 敬語を使用しないことに対する容認期待

敬語を使わなくても容認されるという期待が相手によって異なるか否かを検討するために、容認期待の値(範囲は1~3)を従属変数として3(発話;「今日の授業は休講じゃないん?」、「ちょっと、ハサミ貸して」、「ええ、たいぎい」)×5(相手;教師A, 教師B, 教師C, 教師D, 教師E)の2要因(いずれも被験者内)の分散分析を行った(Fig. 2参照)。

その結果、発話要因の主効果が見られ( $F(2, 224) = 19.37$ )、下位検定を行ったところ「今日の授業は休講じゃないん?」( $\bar{X} = 2.18$ )≒「ちょっと、ハサミ貸して」( $\bar{X} = 2.11$ )>「ええ、たいぎい」( $\bar{X} = 1.97$ )であった。すなわち、相手から用事を頼まれて「ええ、たいぎい」と答えることは容認されにくいと考えているようである。また相手要因の主効果が見られ( $F(4, 448) = 157.22$ )、下位検定を行ったところ教師E( $\bar{X} = 2.54$ )≒教師B( $\bar{X} = 2.50$ )>教師C( $\bar{X} = 2.12$ )>教師A( $\bar{X} = 1.66$ )>教師D( $\bar{X} = 1.44$ )であった。すなわち、敬語を使わなくても容認されるという期待は、相手によってかなり異なることが判明した。しかもこの序列は、各相手に対する発話内容の丁寧さの序列と逆の関係になっている。

\*1) 有意差の検定はすべて両側検定、有意水準はすべて1%とした。

\*2) 下位検定はすべてチューキーのHSD法による。

\*3) 「>」記号は有意差であり、「≒」記号は有意差なしを表す。

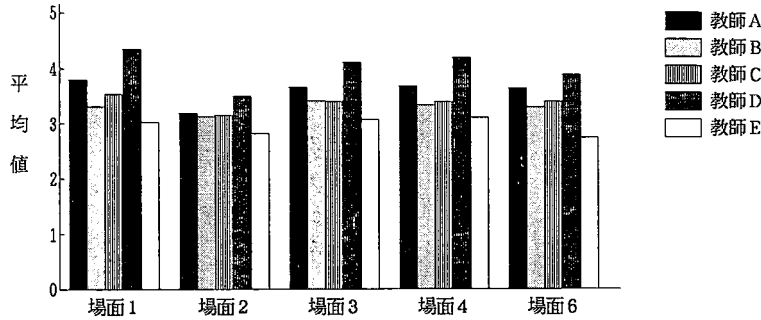


Fig. 1 場面と相手別の発話内容の丁寧さの平均値

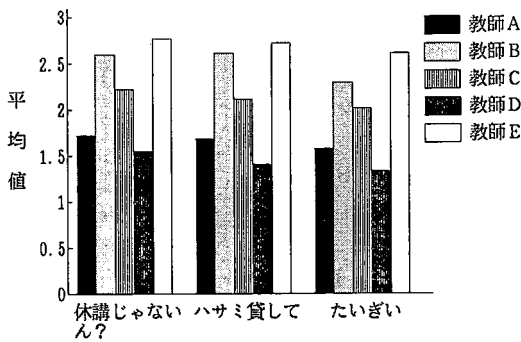


Fig. 2 相手別の容認期待の平均値

### 3.3 相手との心理的距離

まず、食堂での着席距離が相手によって異なるか否かを検討するために、着席距離の値（範囲は1～7）を従属変数として5水準（教師A，教師B，教師C，教師D，教師E）による1要因（被験者内）の分散分析を行い、有意なF値（ $F(4, 444) = 13.64$ ）が得られた。下位検定を行ったところ教師B（ $\bar{X} = 5.09$ ）≒教師A（ $\bar{X} = 4.86$ ）>教師D（ $\bar{X} = 4.46$ ）≒教師E（ $\bar{X} = 4.29$ ）および教師C（ $\bar{X} = 4.74$ ）>教師Eであった。すなわち、食堂での着席距離は相手によって異なることが判明した。しかしこの序列は、各相手に対する発話内容の丁寧さの序列と関連が見い出されない。

次に、同心円図での距離が相手によって異なるか否かを検討するために、同心円図での距離の値（範囲は1～6）を従属変数として5水準（教師A，教師B，教師C，教師D，教師E）による1要因（被験者内）の分散分析を行い、有意なF値（ $F(4, 452) = 40.20$ ）が得られた。下位検定を行ったところ教師B（ $\bar{X} = 4.41$ ）≒教師C（ $\bar{X} = 4.24$ ）≒教師A（ $\bar{X} = 4.14$ ）>教師E

（ $\bar{X} = 3.09$ ）≒教師D（ $\bar{X} = 3.04$ ）であった。すなわち、同心円図での距離も相手によって異なることが判明した。しかしこの序列も、各相手に対する発話内容の丁寧さの序列と関連が見い出されない。

### 3.4 発話内容の丁寧さと心理的距離の関係

発話内容の丁寧さと心理的距離との間に関係があるか否かを検討するために、場面ごとに発話内容の丁寧さと着席距離および同心円図での距離との間でピアソン積率相関係数を求めた。その結果、いずれの場合も有意な相関は見られなかった。しかし、相手別にピアソン積率相関係数を求めたところ、教師Dに関して場面2と場面4において発話内容の丁寧さと着席距離の間に有意な負の相関が見られた（場面2で  $r = -.246$  ( $n = 116$ )，場面4で  $r = -.326$  ( $n = 115$ ))。すなわち、「レポートの提出に来たことを相手に伝える場面」や「授業中に質問されて、聞き取れなかったのもう一度言ってほしいと要請する場面」では、教師Dに対する心理的距離が近い人ほど発話内容が丁寧になると言える。また、教師Eに関して場面2において発話内容の丁寧さと同心円上の距離の間に有意な正の相関が見られた（ $r = .288$  ( $n = 115$ ))。すなわち、「レポートの提出に来たことを相手に伝える場面」では教師Eに対する心理的距離が近い人ほど発話内容が丁寧でないと言える。

### 3.5 発話内容の丁寧さと敬語を使用しないことに対する容認期待の関係

発話内容の丁寧さと敬語を使わなくても容認されるという期待との間に関係があるか否かを検討するために、場面ごとに2つの変数の間でピアソン積率相関係数を求めた。その結果、すべてにおいて有意な負の相

Table 4 各場面の発話内容の丁寧さと敬語を使用しないことに対する容認期待との相関関係

	発 話		
	「今日の授業は休講じゃないん？」	「ちょっと、ハサミ貸して」	「ええ、たいぎい」
場面 1	-.410* (577)	-.384* (578)	-.385* (578)
場面 2	-.168* (578)	-.233* (579)	-.201* (579)
場面 3	-.269* (569)	-.299* (570)	-.301* (570)
場面 4	-.338* (563)	-.382* (564)	-.340* (564)
場面 5	-.171* (459)	-.267* (460)	-.232* (450)
場面 6	-.242* (567)	-.274* (568)	-.230* (568)

\* は、1%水準 (両側検定)

( )内は、サンプル数

関が見られた (Table 4)。すなわち、敬語を使用しなくても相手が容認してくれると期待するほど、発話内容の丁寧さが低くなると言える。

#### 4. 考 察

親疎関係が敬語使用に影響を与えているのではないかという予想が、いろいろな論著の中で述べられている (南, 1987 など)。従来の研究では直観的に、親しくなければ敬語を使うだろう、親しければ敬語の使用は減少するだろうと考えられることが多かった。ここでは、親疎関係と敬語使用との関係が、自明の事実のごとく扱われてきたきらいがある。同時に、親疎関係が上下関係と混同されていた面もある。確かに、上下関係の成立する対人関係の場面では、「上」の相手に対して、敬語の使用量は増す。この事実も、多くの調査で確認されているし、日常生活でも至るところで経験する。このとき、「上」の関係の相手とは普通あまり親しくないことが多く、相手と一定の距離を保っていたいこともある。そこには上下の関係とともに親疎の関係が同時に発生する。このため、上下と親疎の二つの関係が混同され、親疎関係も敬語使用に影響を与えているかのような印象が生まれてきた側面もあろう。南 (1987) では、上下関係と親疎関係とが外的条件の中で区別されているが、これは適切な分類であると言える。

心理的な親疎関係が敬語選択の判断基準となり得ることは十分可能性のあることであるが、やはり実証的に検討してみる必要がある。本稿では、上下関係の要因を排除するために、発話相手を「教師」に限定して

いる。これによって、上下関係による影響はすべての発話相手に対して、同様に働いていると考えることができる。結果で述べたように、着席距離および同心円図上での距離を用いて測定した心理的距離と発話内容の丁寧さとの間には、一例を除いて有意な正の相関は認められず、有意な負の相関が認められたものがわずかに二例あった。このことは、親疎関係の中でその中心をなすと考えられる心理的な距離が、敬語使用に影響していないことを表している。教師に対して親しみを抱いていてもきちんと適切な敬語を使用することもあれば、身近に感じていない相手にもそれほど丁寧な敬語を使用していないこともあると言える。すなわち、相手に対して親しみを感じているか、疎遠な感情を抱いているかといったことは、それ単独では敬語使用を左右するものではないようである。

一方、心理的距離よりも敬語行動と関連の深い要因が、敬語を使用しないことに対する容認期待であった。質問の内容は、非敬語表現 (マイナス敬語でない) を使用したときに、その言動が容認されるか、容認されずに注意や叱責を受けるかというものである。調査で設定した3つの非敬語表現すべてにおいて負の相関が見られ、敬語を使用しなくても容認されるだろうと期待されるほど、相手に対する敬語表現が少なくなっている。つまり、敬語の使い方に関しての態度が寛大な教師には敬語の使用が相対的に少なくなり、逆に敬語への態度が厳格な教師には敬語をきちんと使用するという被調査者の傾向がうかがえる。

林 (1973:54) は、敬語行動をささえる心理的な側面に言及し、敬語行動の心理的側面には「自己関与

性」があるとしている。林の言う自己関与性は、敬語行動において自分というものの位置付けが重要である場合があり、その最も顕著な表れは、「負い目」の表現であるとしている。たとえば、負い目を負う相手や恩に着る相手に対しては、より丁寧な発話になることをだれしも経験しているであろう。敬語行動を主に相手に対する働きかけとしてとらえることの多い中で、林の指摘は、発話者自身を中心にして敬語行動を説明しようとしている点で注目される。本稿の結果で明らかとなった敬語を使用しないことに対する容認期待と敬語行動との関連も、一種の自己関与性と見ることができのではないだろうか。敬語を使用することによって、積極的に相手への敬意を表現しようとする態度とともに、その場面で敬語を使用しておくことで相手からの叱責等を回避しようとする、自己への配慮も背後にあると考えられるからである。

しかし、「負い目」の表現がどちらかといえば無意図的であるのに対して、厳格な教師にきちんと敬語を使用するという行動はどちらかといえば意図的である。相手に特定の印象を与えようとする試みを自己呈示 (self-presentation) というが、敬語行動も自己呈示の一つとしてとらえることもできるのではないだろうか。Tedeschi & Norman (1985) は、自己呈示を戦術的 (一時的) か戦略的 (長期的) か、防衛的 (否定的な印象を与えることを回避する) か主張的か (積極的に特定の印象を与えようとする) の2つの次元で分類している。この分類の方法でいえば、敬語行動は戦術的かつ防衛的の自己呈示に含まれよう。結果で述べたように、二例ではあるが心理的距離と発話内容の丁寧さとの間に有意な負の相関が認められた。この二例の場合、相手が心理的に近い存在であるからこそ否定的な印象を与えたくないという意識が働いたと解釈することもできる。

以上のことからすれば、敬語行動の規定因を考える上で、これまでのように相手への敬意度や相手との関係という要因だけでなく、発話者自身の動機も重要な要因として位置づける必要がある。

## 5. おわりに

敬語行動の規定因として、心理的距離はあまり有効に働いていないことがわかった。一方、容認期待と敬語使用とは関連が深かった。敬語を使用しないと注意や叱責などの反発を買うような相手には、敬語の使用が増し、その敬語も丁寧さの度合いが高い傾向にあった。これは、敬語行動が、単に相手中心に実現されているものではなく、自己への返報も重要な考慮すべき要因となっていることをうかがわせる結果である。敬語行動の規定因としてはこのほかに、相手のことをどう見ているかといった、対人印象も検討すべき課題である。次回の報告では、パーソナリティ認知と敬語行動の関連について検討してみたい。

## 参考文献

- 井出祥子ほか 1986 日本人とアメリカ人の敬語行動 南雲堂。  
 国立国語研究所 1957 敬語と敬語意識 国立国語研究所報告 11。  
 Tedeschi, J. T. & Norman, N. 1985 Social power, self-presentation, and the self, in B. R. Schlenker (Ed.), *The self and social life*, New York, McGraw-Hill.  
 林 四郎 敬語と人間行動, 林 四郎・南不二男編 行動の中の敬語 明治書院, 33-66。  
 広兼孝信 1992 青年の敬語使用に関する研究, 広島文化女子短期大学紀要 25, 11-17。  
 藤原與一 1978 方言敬語法の研究 春陽堂書店。  
 益岡隆志 1991 モダリティの文法 くろしお出版。  
 南不二男 1982 現代日本語の構造 大修館書店。  
 南不二男 1974 敬語研究の観点, 林 四郎・南不二男編 敬語研究の方法 明治書院, 7-38。  
 南不二男 1987 敬語 岩波書店。

## 謝 辞

調査にご協力いただいた学生および教師の皆様方に、心より感謝いたします。



### Summary

The derivation of the conversational implication for expressing politeness in Japanese are governed by a set of pragmatic rules.

The purpose of this study is to find out the relation between the system of polite expressions in Japanese, the speech style and the interpersonal impression from a pragmatic and psychological perspective.

And results show that the psychological distance between speakers and addressees and the speech style of polite expressions are not correlated, and speakers' speech style and the expectation of hearers' toleration for using non-polite expressions are mutually related.